

岩手県文化財調査報告書第35集

東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書

— III —

昭和54年3月

岩手県教育委員会

日本国有鉄道盛岡工事局

# 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書

— III —



## 序

本県には、はるか数万年前から人間の営みがあり、その後たゆまぬ先人の努力と叡智によりすぐれた郷土の文化が現代の生活に受けつがれています。その先人の文化遺産を保存、保護し活用すると共に未来へと伝えることが私たちの責務でもあります。

全国新幹線鉄道整備法にもとづき遺跡の豊庫といわれる北上川流域を縦貫する東北新幹線建設工事実施計画が昭和46年10月に認可されました。

これに関連し、失われようとする埋蔵文化財の取り扱いについて慎重な配慮のもとに、可能な限り保存するための協議がおこなわれましたが、最終的には48遺跡について記録保存を前提とした発掘調査を実施することとなり、文化庁と日本国有鉄道との覚え書にもとづき、日本国有鉄道盛岡工事局からの委託事業として岩手県教育委員会が調査主体となり、昭和47年10月から昭和52年12月まで5年6ヶ月にわたる発掘調査を実施してまいりました。

この調査により宮城県境より盛岡市に至る地域の原始・古代から近世における歴史を解明する貴重な資料の数々を得ることができました。

本報告書は調査した48遺跡のうち紫波町・矢巾町・都南村・盛岡市に関係した21遺跡について第3分冊として刊行するはこびとなったものでありますが、いささかでも埋蔵文化財の活用と学術研究のために役立つことができれば幸いです。

最後にこの調査について長期間にわたりいろいろ御援助、御協力いただいた地元教育委員会をはじめ関係各位に対し心から感謝申し上げます。

昭和54年3月

岩手県教育委員会

教育長 畑山新信



## 例 言

1. 本書は東北新幹線関係遺跡発掘調査報告書7分冊の中の第3分冊として、昭和49年度から昭和51年度に発掘調査を実施した紫波町・矢巾町・都南村および盛岡市所在の19遺跡について作成したものである。

2. 遺跡の記載は南（紫波町）から順に編集した。

3. 本書収録遺跡の発掘調査、および調査資料において次の方々からご指導、ご助言を賜わった（敬称略）。

・岩手大学名誉教授 板橋 源 • 岩手大学教授 草間 俊一  
・北海道大学助教授 林 謙作 • 岩手県文化財審議会委員 司東 真雄

4. 本書における資料の鑑定・分析などについては、次の方々と機関からご教示、ご協力を賜わった（敬称略）。

・石材鑑定

岩手県立杜陵高等学校教諭 佐藤 二郎

・炭化材樹種鑑定

岩手大学農学部助教授 吉田 栄一

・種子鑑定

東北林業試験場東北支場研究所顧問 村井 三郎

・遺構埋土堆植物（火山灰）の定量分析及びX線回折

岩手県工業試験場

・炭化材<sup>14</sup>C試料測定

日本アイソトープ協会

・陶磁器鑑定

東京国立博物館学芸部東洋課課長 長谷部榮爾

〃 工芸課技官 矢部 良明

5. 本書に掲載した地形図・空中写真は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図・20万分の1地勢図、および2万分の1空中写真を使用したものである。

6. グリッド配置図は、日本国有鉄道作成による500分の1地形図を使用した。

7. 土質柱状図は、日本国有鉄道所有のボーリング資料等を参考にした。

8. 本書の観察表・図版は、次の要項に従って作成されている。

(1) 遺跡における層相と遺物の色調観察は、小山・竹原編著『新版・標準工色帖』日本色研事業(株)を使用した。

(2) 遺構・遺物の実測図は、原則として統一した縮尺になるよう努めた。

9. 方向は、新平面直角座標第X系（東北）による座標北を矢印で示してある。

原点 ( 紋度 140°50'00"000 )  
緯度 40°00'00"000 )

各遺跡の基準線と座標北との方向角は別表（第1表）のとおりである。

10. 遺物・写真・実測図等の資料は、岩手県教育委員会文化課において保管している。

11. 調査主体者

岩手県教育委員会・日本国有鉄道盛岡工事局

12. 調査担当者

岩手県教育委員会事務局文化課

[昭和53年度]

文化課長 菅原一郎

課長補佐 小野寺昭吾 同 小野寺登

庶務係長 加藤勝男

主事 鈴木喜代治 同 佐藤伸一郎

(埋蔵文化財班)

主任文化財主査 鳴千秋

文化財主査 菊地郁雄

技師 国生尚

○新幹線調査班

文化財主査 菅原弘太郎 同 細谷英男 同 朴沢正耕

社会教育主事補 鈴木隆英

技師 佐々木勝

13. 本書の執筆のまとめは次のとおりである。

・調査の経過……………鳴千秋

・調査の方法・整理の方法……………朴沢正耕

・野上遺跡・古館駅前遺跡・古館橋遺跡・羽川柵擬定地・前九年Ⅰ遺跡・

前九年Ⅱ遺跡・長畑遺跡……………細谷英男

・大銀遺跡・大日堂遺跡・杉ノ上Ⅲ遺跡・高畑遺跡・下赤林Ⅰ遺跡・

下赤林Ⅱ遺跡・下赤林Ⅲ遺跡……………朴沢正耕

・田頭遺跡・津志田遺跡……………菅原弘太郎

・杉ノ上Ⅱ遺跡・又兵衛新田遺跡・下永井遺跡……………佐々木勝

・杉ノ上Ⅰ遺跡・南仙北遺跡……………鈴木隆英

なお遺物・図面の整理・実測、および写真的撮影などは次の者があたった。

坂川進 齋藤孝 鈴木優子 古沢友治 佐藤正彦 熊谷由美子

浅利孝子 伊東由美子 小林史子 村上良子 下村奈々子 屋和田恵子

小林三千江 平野邦子

14. 各遺跡の執筆にあたっては、つとめて文中の記述の統一に心がけたが、充分な検討を欠いた向きもある。

# 目 次

## 序 文

1. 調査の経過	1
2. 調査の方法	4
3. 整理の方法	5
4. 広報活動の実施	5

東北新幹線関係遺跡一覧

東北新幹線関係遺跡位置図

## 本 文

### 紫波南部地区の概観

1. 紫波南部地区の地形と環境	11
2. 周辺の遺跡	13

### 野上遺跡

1. 遺跡の位置と環境	19
2. 調査の方法と経過	19
3. 調査の結果	20
4. 考察とまとめ	29

### 大銀遺跡

1. 遺跡の位置と環境	33
2. 調査の方法と経過	33
3. 調査の結果	33
4. まとめ	36

### 大日堂遺跡

1. 遺跡の位置と環境	41
2. 調査の方法と経過	41
3. 調査の結果	43
4. 考察とまとめ	48

### 田頭遺跡

1. 遺跡の位置と環境	53
2. 調査の方法と経過	53

3. 調査の結果	53
4. 考察	83
5. まとめ	87

### 杉ノ上Ⅲ遺跡

1. 遺跡の位置と環境	91
2. 調査の経過と方法	91
3. 調査の結果	93
4. まとめ	122

### 杉ノ上Ⅳ遺跡

1. 遺跡の位置と立地	131
2. 調査の経過	131
3. 調査の成果	132
4. 考察	163
5. まとめ	168

### 杉ノ上Ⅰ遺跡

1. 遺跡の位置と環境	173
2. 調査の方法と経過	175
3. 調査の結果	176
4. まとめ	211

### 古館駅前遺跡

1. 遺跡の位置と環境	223
2. 調査の方法と経過	223
3. 調査の結果	225
4. 考察	244

### 古館橋遺跡

1. 位置と環境	253
2. 調査の経過と方法	253
3. 調査の結果	255

4. 考察	266	下赤林Ⅲ遺跡	
5.まとめ	269	1. 遺跡の位置と環境	311
<b>紫波地区北部～盛岡地区南部の概観</b>		2. 調査の方法と経過	311
1. 各遺の位置	271	3. 調査の結果	311
2. 遺跡の立地	271	4. まとめ	319
3. 周辺の道路	273	<b>下水井遺跡</b>	
<b>又兵衛新田遺跡</b>		1. 遺跡の位置と立地	323
1. 遺跡の位置と環境	279	2. 調査の経過	323
2. 調査の経過	279	3. 調査の結果	325
3. 調査の結果	279	4. まとめ	329
4. まとめ	280	<b>津志田遺跡</b>	
<b>高畠遺跡</b>		1. 遺跡の位置と環境	333
1. 遺跡の位置と環境	283	2. 調査の方法と経過	333
2. 調査の方法と経過	283	3. 調査の結果	333
3. 調査の結果	283	4. まとめ	336
4. まとめ	285	<b>南仙北遺跡</b>	
<b>下赤林Ⅰ遺跡</b>		1. 遺跡の位置・立地と現状	339
1. 遺跡の位置と環境	289	2. 調査の方法と経過	341
2. 調査の方法と経過	289	3. 調査の結果	341
3. 調査の結果	291	4. 考察とまとめ	345
4. まとめ	300	<b>盛岡地区北部の概観</b>	
<b>下赤林Ⅱ遺跡</b>		1. 盛岡地区北部の概観	349
1. 遺跡の位置と環境	303	2. 周辺の遺跡	349
2. 調査の方法と経過	303	<b>崩川橋擬定地</b>	
3. 調査の結果	303	1. 遺跡の位置と環境	355
4. まとめ	307	2. 調査の方法と経過	355
		3. 調査の結果	357
		4. 考察	375

5.まとめ	378
-------	-----

#### 前九年Ⅰ遺跡

1. 遺跡の位置と環境	381
2. 調査の方法と経過	381
3. 調査の結果	383
4. 考察	396
5.まとめ	403

#### 前九年Ⅱ遺跡

1. 遺跡の位置と立地	407
2. 調査の方法と経過	409
3. 調査の結果	409
4.まとめ	414

#### 長畠遺跡

1. 位置と立地	427
2. 調査の方法と経過	428
3. 調査の結果	428
4.まとめ	438

#### 写真図版

空中写真	441
野上遺跡	447
大銀遺跡	449
大日堂遺跡	451
田頭遺跡	455
杉ノ上Ⅲ遺跡	461
杉ノ上Ⅱ遺跡	471
杉ノ上Ⅰ遺跡	479
古館駅前遺跡	487
古館橋遺跡	492
又兵衛新田遺跡	495

高畠遺跡	496
------	-----

下赤林Ⅰ遺跡	497
--------	-----

下赤林Ⅱ遺跡	501
--------	-----

下永井遺跡	503
-------	-----

津志田遺跡	505
-------	-----

南仙北遺跡	507
-------	-----

扇川柵擬定地	509
--------	-----

前九年Ⅰ遺跡	513
--------	-----

前九年Ⅱ遺跡	517
--------	-----

長畠遺跡	519
------	-----

発掘調査担当者および協力機関	521
----------------	-----

発掘調査地元作業員名簿	522
-------------	-----

整理作業員名簿	524
---------	-----



# 序 文

## 1. 調査の経過

昭和46年から実施された岩手県内東北新幹線建設工事に関係する埋蔵文化財発掘調査は一関市より盛岡市に至る約10kmの間がその対象であり、発掘調査実施前の協議・分布調査の段階から発掘調査実施・調査結果の報告書刊行まで約9年の歳月を要した。ここでは1. 発掘調査実施前の経過、2. 年度別発掘調査の経過、3. 整理・報告書作成の経過に大別し、その概要についてまとめたい。

### [1] 発掘調査実施前の経過

全国新幹線鉄道整備法（昭和45年5月18日法律第71号）に基づく東北新幹線建設予定地内における県内埋蔵文化財の取扱いについての最初の協議は昭和46年5月17日に日本国有鉄道盛岡工事局と岩手県教育委員会との間で行なわれ、運輸大臣に提出する申請書に添付する文化財資料は遺跡台帳により作成することとし、今後県教育委員会は分布調査実施のための準備と、建設工事に関連ある範囲内での遺跡についての情報を提出することとした。昭和46年11月2日、新幹線建設予定地内の分布調査実施のための協議をもち、調査員は県教育委員会が関係市町村教育委員会の協力のもとに、県文化財専門委員・考古学専攻者・発掘調査経験者の中から委嘱をし、市町村単位ごとに班の構成をした。遺跡分布調査は宮城県境より盛岡市に至る約10kmを巾2kmの範囲で実施することとし、11月20日より約2ヶ月の期間で終了した。その結果93遺跡が確認された。

昭和47年4月に主管課である社会教育課に4名の埋蔵文化財担当職員を文化財主査として配置し、さらに4名の嘱託補助員を採用した。東北新幹線担当職員として鳴文化財主査が当り他は東北縦貫自動車道関係の業務を担当しそれぞれの業務の遂行に当った。更に同年6月1日より10日までの間、新幹線ルート用地杭の設置時期に合わせセンター杭を中心に20m巾に含む遺跡範囲確認のための現地調査を鳴・菊池文化財主査によって行ない、その結果43遺跡を発掘調査対象遺跡として決定した。その後、新幹線関連事業として東北本線北上貨物操作場の建設予定地と用地問題で現地踏査ができずにいた花巻地区の分布調査の追加により最終的に48遺跡が発掘調査対象の遺跡となった。その結果に基づき調査行程・方法等について協議を進め、全遺跡が記録保存を前提としての発掘調査を実施することにした。

## 〔2〕発掘調査の経過

当初、東北新幹線開業は昭和51年度であり49年度中に発掘調査を終了しなければ支障があるということが調査計画立案にあたっての最大の悩みでもあった。そのため野外の発掘調査を優先先行させ、調査結果の整理・報告書の作成・刊行は別途に考えることとした。そのことから冬期間に入ても発掘調査を継続せざるを得ないこともあります、調査の精度や報告書作成の面からも反省すべき点が多くあった。調査開始後の経過の中で国内経済に大きな影響を与えた総需要抑制政策等が原因となって、東北新幹線開業時期が延期となり発掘調査期間は昭和47年10月から52年10月までとなった。調査結果の整理と報告書作成作業は53・54年度の2ヶ年で実施することとした。なお、埋蔵文化財発掘調査委託の契約は年度ごとに日本国有鉄道盛岡工事局長と岩手県知事との間で締結された。調査主体者は岩手県教育委員会教育長、調査主管課は岩手県教育委員会事務局文化課である。

次に年度ごとの主な発掘調査経過について略記する。

**昭和47年度** 調査員3名、補助員1名、調査期間10月25日～12月18日。3遺跡。

矢巾町所在の下赤林Ⅰ遺跡・下赤林Ⅲ遺跡・高畠遺跡を調査した。この期間は用地未買収地の調査であり、国鉄が地権者より発掘承諾書を得ての調査であった。

**昭和48年度** 調査員8名、補助員5名、調査期間5月1日～1月29日、8遺跡。

4月、文化課の新設と共に埋蔵文化財調査班が誕生し、本格的な発掘調査が開始された。しかし、用地買収の関係などから年間スケジュールが確保しないまま、まず北上貨物操作場関連遺跡の南館遺跡よりスタートした。ここでは発掘調査方法の統一化を計るために新幹線班全員による合同研修調査を実施した。そして7月より1遺跡2名の調査員と1名の補助員を最低の班構成員とし、遺跡規模によって構成員を調整することとして8遺跡の調査を実施した。夏休み期間には発掘調査の経験のある教員・岩手大学生・京都女子大生の協力参加を得た。12月に入って杉の上Ⅱ遺跡において平安時代の焼失竪穴住居跡から多量の炭化材の発見があり、降雪と炭化材の処理上やむを得ずビニールハウスの設置の中で1月下旬まで冬期間の調査となった。

**昭和49年度** 調査員8名、補助員5名、調査期間4月8日～12月20日、17遺跡。

江刺市と稗貫郡石鳥谷町所在の遺跡が主な調査地域となった。江刺市落合Ⅱ遺跡は分布調査による遺跡範囲は北上川流域に広がる河岸低地における水田面より約1m高い微高地一帯としていたが、水田面における新幹線高架橋建設工事中に多量の遺物が発見され、地元教育委員会からの連絡があり、そのため遺跡範囲を広げ調査した結果、水田面下旧河道の泥炭層から平安時代の豊富な遺物資料の発見となり貴重な遺跡となった。江刺地区的調査は北上川東岸一帯であり各遺跡は蛇行しながら南下する北上川とその支流である広瀬川・人首川・伊手川の氾濫により度々冠水をうけていることから遺構の検出、精査の際に土層判別と遺構範囲の確認に手

間どり多くの時間を費やした。

**昭和50年度 調査員8名、補助員7名、調査期間4月10日～2月21日、15遺跡。**

調査地区が、一関市・江刺市・北上市・花巻市・紫波郡紫波町・郡南村・盛岡市と広範囲になり調査班相互の連絡・調整が困難な年であった。7月に北上市鬼柳町分の新幹線建設予定地内にあったイチョウの大木の根元から一字一石絆を地元民である佐藤忠二・佐藤丑蔵氏が発見されたことから鬼柳西裏遺跡としての取り扱いをすることとした。調査の結果、縄文時代・平安時代・近世の各時期にわたる複合遺跡となり2年継続の調査となった。また江刺市宮地遺跡は奈良時代から平安時代にかけての大集落跡となり調査中に2基の井戸が発見され、そのため乾水期である冬期間の調査となった。厳寒の中で2月末までの調査となり遺構実測図の完成と井戸桿のとり上げを行なった。紫波町西田遺跡は北上山地における小丘陵の西端にあり、蛇行する北上川によって切離された台地に立地し淹名川と北上川低地に囲まれた残丘上にある。標高100m前後で周辺の水田面との比高は約10mである。この丘陵のほぼ中央を南北に緩断する新幹線予定地を調査対象としたが、ほとんどが山林であり遺跡としての確認はなかなかつかめなかった。立地形に調査根拠をもつこともあって、まず本年度は遺構検出のための調査を目的としたグリッド方式と重機使用（バックホー）による表土はぎを行なった。その結果、縄文時代早期・中期、平安時代にわたる大遺跡であることが確認された。

なお、年度末人事異動で48年度より調査を担当した峰谷艸平氏が高田小学校へ転勤された。

**昭和51年度 調査員7名、補助員8名、調査期間4月9日～12月23日、9遺跡。**

昨年度よりの調査継続である江刺市宮地遺跡・北上市鬼柳西裏遺跡・紫波町西田遺跡と盛岡市所在の4遺跡が調査の中心であり本年度で48全遺跡について調査が及んだことになった。西田遺跡は北部地区に縄文時代中期の墓壙群を中心とする集落の全貌が現われ次年度の調査によって結着をつけざるを得ないこととなった。48年度から新幹線班で調査担当した宍倉圭介氏が県立遠野農業高校へ、菊池久氏は釜石市立大松小学校へそれぞれ年度末人事異動で転勤された。

**昭和52年度 調査員6名、補助員7名、調査期間4月11日～12月15日、1遺跡。**

紫波町西田遺跡のみの調査となった。縄文時代中期における墓壙群・円筒形ピット群・貯藏穴群・住居跡群によって構成された大遺跡の調査をもって新幹線関連48全遺跡の発掘調査を終了した。調査の整理はそれぞれの年度における発掘調査終了後、分室において図面・写真・遺物等の整理を一部実施した。

### **[3] 整理・報告書作成の経過**

**昭和53年度 調査員6名、補助員12名。**

53・54年度の2年間にわたる本格的な整理作業に入った。本年度は48遺跡のうち40遺跡の報

告書作成のための作業を実施した。報告書は3分冊とし、1分冊は一関・江刺地区(10遺跡)、2分冊は北上・花巻・石鳥谷地区(11遺跡)、3分冊には紫波・矢巾・都南・盛岡地区(19遺跡)を収録した。

## 2. 調査の方法

各遺跡の調査は原則として以下のような方法を用いた。

### 調査対象範囲の選定

新幹線建設地内、及び付帯施設建設地内にかかる遺跡は、全て調査対象とした。

### 調査区の設定

調査対象範囲全域にグリッドを設定し、計画的な調査と同時に造構の平面的位置の把握につめた。グリッドは調査地の地形を考慮し、東北新幹線の任意の中心杭の2点(東京基点の距離が明示してあるもの)を原点とし、両者を結ぶ線、およびこれに直交する線を基準線とし3m単位に割付け、30mで1地区とした。グリッド名は東西方向を数字、南北方向をアルファベットで表わし、両者の組合せで呼称した。なお、地区名は調査区の北から順に設定した。

### 発掘の方法

#### (1) 探索発掘と全面発掘

調査対象範囲内における造構の分布状況を調べるため、原則として3m×3mのグリッドを市松状に粗掘し、検出作業を進めた。また、基本的な層位の把握のための深掘りを設定した。造構や遺物を含む層が検出された場合は、その具体的な内容と分布関係などを究明するため、必要な範囲にわたって全面発掘を行なった。

#### (2) 造構調査の方法

検出された造構については、該当のグリッド名を付した。その場合、最も北西に位置するグリッドで呼称した。造構の精査にあたっては、記述項目を統一したカードなどを使用した。

#### (3) 遺物の取り上げ

a. 遺物は原則としてグリッドごとに取り上げ、遺跡記号・出土年月日・出土地点・出土層位を記録の上、取り上げた。

b. 出土遺物のうち、その造構に直接関係するものや、年代決定資料となり得るものについては、出土レベルと位置を平面図に記録し、遺物番号を付して取り上げた。

### 3. 整理の方法

#### (1) 図面整理の方法

発掘調査時に作成した図面は次のような要領で整理した。

第一原図は、点検・修正の上、登録番号を付し、それをもとに第二原図を作成し、それぞれを図面台帳に記載した。

#### (2) 遺物整理の方法

遺物のうち、発掘現場で接合作業まで進んだものもあるが、ほとんどは分室で進めた。これらの遺物は、洗浄し、遺跡記号・採取年月日・遺構・地区名・層位・遺物番号を付し、接合・復元作業を進めた。その後、分類作業を進める中で、資料化できる遺物について、実測図・拓本の作成をし、写真撮影をした。

#### (3) 写真整理の方法

写真是遺跡ごとにそれぞれのネガと密着焼付のものをアルバムに貼付し、遺構名・地区名・遺物番号・関係実測図番号・撮影方向などを記入し、整理した。

### 4. 広報活動の実施

調査内容を広く知らせ、文化財についての関心を深めてもらうことを意図し、次のような活動をした。

- 現地説明会
- 現場だよりの発行
- 諸団体への資料提供・説明

#### (4) 実測図の作成

断面図一断面図は基本層位、造構の堆積状態や造構細部の在り方を示す造構断面を作成した。原則として、原図の縮尺は $1/50$ であるが、カマド・炉・埋設土器などの細部については、必要に応じて $1/5$ などの縮尺を用いた。各層における土色・土性・混入物・堅さ・遺物のあり方などの注記は統一を心がけたが一部統一を欠いたものもある。

平面図一平面図は調査区全域を表現したもの、遺物や遺物包含層での遺物の出土状況を記録するための部分的なものとがある。原図の縮尺は $1/50$ を原則としたが、必要に応じて $1/5$ などの縮尺を用いた。測量方法は、遺り方測量により作図した。

#### (5) 写真的記録

記録として撮影した写真には、35mm版モノクロ写真・35mm版カラー写真・35mm版エクタクローム写真(スライド用)・ $6 \times 7$ cmモノクロ写真・35mm版赤外線写真などがある。

#### (6) その他の記録

調査記録として、調査日誌・業務日誌を各遺跡ごとに備え、記録した。また、調査終了後の整理時においても、業務日誌・作業記録・造構カードを備え、記録した。

第Ⅰ表 第三分冊収録遺跡基準線方向角

(N——極北)

遺 跡 名	原 点 距 離 程	原 点 間 方 向 角
野 上 遺 跡	471.460 —— 471.480	N-W 2° 31' 01"
大 銀 遺 跡	474.160 —— 474.200	N-W 3° 30' 00"
大 日 堂 遺 跡	474.820 —— 474.900	N-W 3° 30' 00"
田 頭 遺 跡	476.260 —— 476.280	N-W 15° 32' 09"
杉 ノ 上 Ⅲ 遺 跡	478.280 —— 478.320	N-W 9° 05' 14"
杉 ノ 上 Ⅱ 遺 跡	478.960 —— 478.980	N-W 9° 05' 14"
杉 ノ 上 Ⅰ 遺 跡	479.100 —— 479.13235	N-W 9° 05' 14"
古 館 駅 前 遺 跡	479.940 —— 479.960	N-W 9° 05' 14"
古 館 橋 遺 跡	480.040 —— 480.060	N-W 9° 05' 14"
又 兵 衛 新 田 遺 跡	483.600 —— 483.800	N-W 9° 05' 14"
高 烟 遺 跡	484.700 —— 484.740	N-W 9° 05' 14"
下 赤 林 I 遺 跡	485.240 —— 485.300	N-W 4° 07' 13"
下 赤 林 II 遺 跡	485.500 —— 485.600	N-E 0° 13' 14"
下 赤 林 III 遺 跡	485.660 —— 485.700	N-W 1° 29' 17"
下 永 井 遺 跡	487.540 —— 487.560	N-W 17° 40' 00"
津 志 田 遺 跡	489.200 —— 489.220	N-W 17° 40' 00"
南 仙 北 遺 跡	490.58070 —— 490.600	N-E 2° 30' 00"
厨 川 櫻 振 定 地 遺 跡	495.200 —— 495.280	N-W 40° 00' 00"
前 九 年 I 遺 跡	495.520 —— 495.70793	N-W 40° 00' 00"
前 九 年 II 遺 跡	496.000 —— 496.080	N-W 25° 30' 00"
長 烟 遺 跡	496.500 —— 496.540	N-E 1° 30' 00"

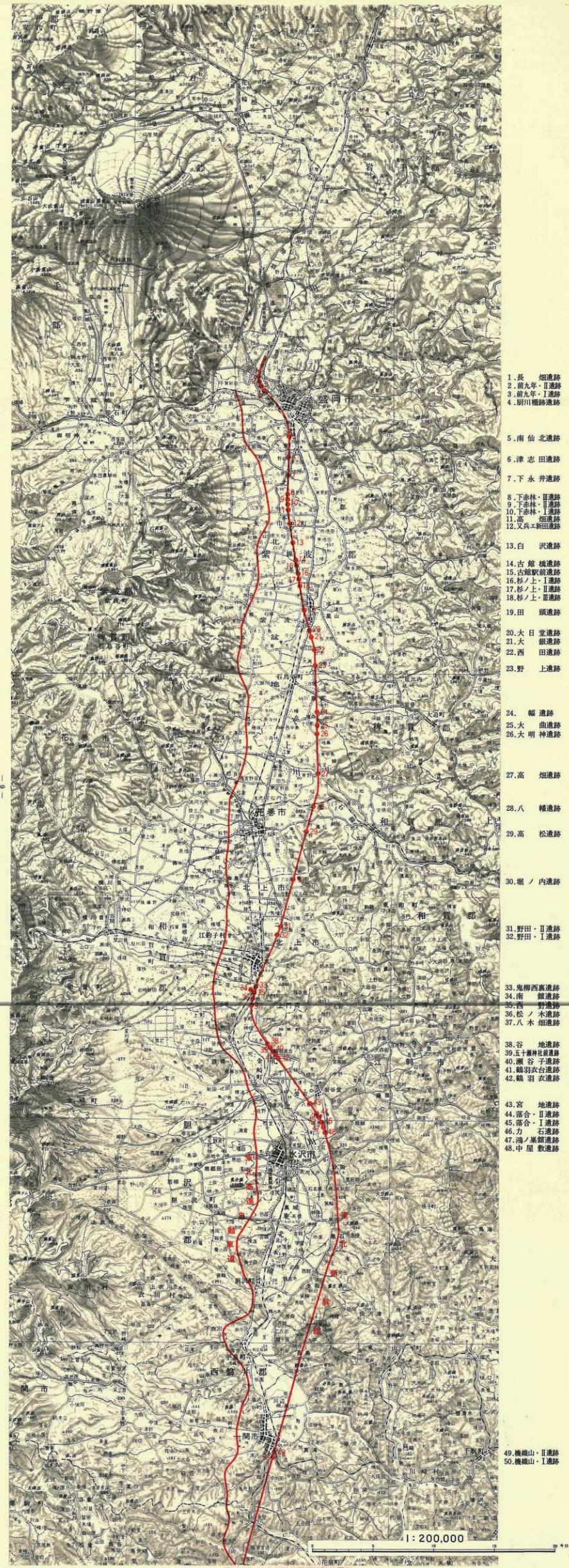
第II表

## 東北新幹線関係遺跡一覧

(位置一覧は第I回を参照)

所在地	遺跡名	調査対象面積	調査期間	収録報告書No.
一関市	機織山Ⅰ遺跡	3,500㎡	昭50. 9. 30～昭50. 11. 29	I
"	機織山Ⅱ遺跡	1,470	昭50. 9. 22～昭50. 11. 11	I
江刺市	中星敷遺跡	5,000	昭48. 12. 10～昭48. 12. 22	I
"	酒ノ巣盆地遺跡	6,400	昭49. 6. 24～昭49. 10. 23	V
"	力石遺跡	2,240	昭49. 4. 8～昭49. 4. 18	I
"	落合Ⅰ遺跡	2,560	昭49. 4. 18～昭49. 8. 5	I
"	落合Ⅱ遺跡	2,420	昭49. 4. 8～昭49. 8. 8	VI
"	宮地遺跡	3,600	昭50. 9. 1～昭51. 7. 26	IV
"	鶴羽衣遺跡	1,280	昭49. 4. 9～昭49. 5. 14	I
"	鶴羽衣台遺跡	960	昭49. 4. 19～昭49. 5. 10	I
"	潮谷子遺跡	2,400	昭49. 5. 8～昭49. 6. 19	I
"	五十瀬神社前遺跡	1,600	昭49. 6. 4～昭49. 7. 30	I
"	谷地遺跡	2,720	昭49. 7. 25～昭49. 9. 3	I
北上市	八木畠遺跡	800	昭49. 11. 28～昭49. 12. 9	II
"	松ノ木遺跡	480	昭50. 12. 16～昭50. 12. 25	II
"	西野遺跡	5,000	昭50. 9. 1～昭50. 12. 25	II
"	南館遺跡	4,660	昭48. 5. 1～昭48. 7. 26	VI
"	鬼柳西裏遺跡	4,400	昭50. 9. 3～昭51. 12. 15	VI
"	野田Ⅰ遺跡	3,000	昭51. 8. 6～昭51. 8. 28	II
"	野田Ⅱ遺跡	1,920	昭50. 9. 1～昭50. 9. 19	II
"	堀ノ内遺跡	2,400	昭50. 7. 7～昭50. 8. 30	II
花巻市	高松遺跡	2,000	昭50. 6. 4～昭50. 7. 9	II
"	八幡遺跡	1,800	昭51. 10. 7～昭51. 11. 25	II
石鳥谷町	高畠遺跡	2,720	昭49. 10. 25～昭49. 12. 20	V
"	大明神遺跡	3,680	昭49. 10. 25～昭49. 11. 22	II
"	大曲遺跡	1,920	昭49. 10. 25～昭49. 12. 12	II
"	船遺跡	2,400	昭49. 11. 18～昭49. 11. 29	II
紫波町	野上遺跡	2,400	昭49. 10. 17～昭49. 10. 29	II
"	西田遺跡	29,600	昭50. 4. 26～昭52. 12. 15	VII
"	大銀遺跡	960	昭50. 4. 10～昭50. 4. 26	III
"	大日堂遺跡	2,240	昭50. 5. 16～昭50. 6. 10	III
"	田頭遺跡	1,760	昭49. 9. 5～昭49. 10. 16	III
"	杉ノ上Ⅲ遺跡	3,402	昭48. 10. 16～昭48. 12. 28	III
"	杉ノ上Ⅱ遺跡	4,276	昭48. 10. 16～昭49. 1. 29	III
"	杉ノ上Ⅰ遺跡	7,200	昭48. 7. 18～昭48. 10. 16	III
"	古館駅前遺跡	3,360	昭48. 10. 1～昭48. 11. 30	III
"	古館橋遺跡	4,200	昭48. 9. 18～昭48. 12. 8	III
矢巾町	白沢遺跡	3,726	昭48. 7. 20～昭48. 9. 29	V
"	又兵衛新田遺跡	2,080	昭49. 10. 18	III
"	高畠遺跡	640	昭47. 11. 24～昭47. 12. 2	III
"	下赤林Ⅰ遺跡	2,720	昭47. 10. 25～昭47. 12. 16	III
"	下赤林Ⅱ遺跡	3,200	昭48. 11. 13～昭48. 12. 19	III
"	下赤林Ⅲ遺跡	2,560	昭47. 12. 2～昭47. 12. 18	III
都南村	下永井遺跡	1,760	昭50. 4. 10～昭50. 4. 24	III
"	津志田遺跡	4,800	昭50. 4. 23～昭50. 5. 15	III
盛岡市	南仙北遺跡	800	昭50. 4. 10～昭50. 4. 25	III
"	明川櫛原定地遺跡	4,600	昭51. 5. 17～昭51. 10. 16	III
"	前九年Ⅰ遺跡	5,150	昭51. 4. 23～昭51. 6. 3	III
"	前九年Ⅱ遺跡	3,400	昭51. 4. 19～昭51. 6. 2	III
"	長畠遺跡	6,370	昭51. 4. 9～昭51. 5. 15	III

※杉ノ上Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡は1遺跡として登録してある。



(第1図) 東北新幹線関係造跡位置図

# 本文



## 紫波南部地区の概観

### 1. 紫波地区の地形環境

#### (1) 遺跡群の位置

東北新幹線は紫波町の南部では北上川東岸の北上山地西麓地帯を走り、紫波町北部に至って東北本線の東側に沿って南北に走る。そのうち、紫波町にかかる遺跡として合計10ヶ所調査されている。南から順に、野上、西田、大銀、大日堂、田頭、杉ノ上Ⅲ、杉ノ上Ⅱ、杉ノ上Ⅰ、古館駅前、古館橋の各遺跡が並ぶ。野上遺跡を除く9遺跡は北上川西岸域に位置し、田頭遺跡より北に位置する遺跡は東北本線と近接している。

#### (2) 遺跡群の立地形

岩手県の県北に源を発する北上川は、岩手県を南北にほぼ直線的に縦断する。紫波地区ではその沿岸西岸一帯に広汎な段丘群の発達がみられる。これは奥羽山脈より流れる滝名川、太田川等の支流によって形成された扇状地や旧河床が段丘化したもので、少なくとも3段以上に分類される。特に中位および低位の段丘が広面積を占めて保存されている。

上記の扇状地性段丘が分布する西側には、東根山、黒森山、諸倉山、台山などの第三系からなる標高500m以上の山地があり、比高300m以上の断層崖をもって扇状地面と接している。

一方、北上川の東岸では、段丘の発達は一般的に不良で、長岡付近にやや顯著に発達する部分がみられるほかは小規模に点在する。

北上川の東岸は近接して北上山系に連なり、丘陵地と山地とからなる。その丘陵は佐比内丘陵と呼ばれ、朝倉山南縁から3～5kmの幅をもって南方に広がっており、石鳥谷地区にまたがって位置する。段丘はこうした丘陵縁辺部に河岸段丘面として小面積で分布する。

北上川中流域西岸一帯に広がる扇状地性段丘群の研究は、部分的にながらも何人かの先駆によってなされている。特に中川久夫氏らは北上川の上中流域全般の総合的研究を行ない、中流域の段丘を3段に分類し、上位より西根段丘、村崎野段丘、金ヶ崎段丘と命名した。<sup>(注1)</sup> 紫波地区ではそれらに相当するものとして、石鳥谷段丘、二枚橋段丘、都南段丘と呼んでいる。

上位の石鳥谷段丘は西部山地東縁の山麓部に断片的に分布するほか、日詰付近にも孤立的にみられる。日詰付近でこの段丘は3m以上の砂、粘土を伴う礫層とこれを覆う厚さ1m前後の火山灰層で構成される。

中位の二枚橋段丘は上位段丘に伴って前面に拡がり、比較的広面積をもって発達している。紫波町二日町付近では4～5mの礫とその上位の砂(1～2m)および粘土(約1m)からなり、その上部を薄い火山灰層が覆っている。



1 古館機 2 古館駅前 3 杉の上I  
 4 杉の上II 5 杉の上III 6 田頭 7 大日堂  
 8 大銀 9 西田(54年度報告) 10 野上

0 2 km



第II図 畿波南部地区的地形分類概念図

下位の都南段丘は中位段丘の外方に広く分布するほか、各支流に沿って発達している。構成層は疊と細～中砂を含む粘土層(2～4m)からなる。

注2)

以上のような地形区分のなかで前記の新幹線開通遺跡の立地状況をみると以下になる。

注3)

北より古館橋、古館駅前の各遺跡は中位段丘上に立地している。この段丘は杉ノ上遺跡以南の中位段丘である二枚橋段丘とは性格を異にする。中川氏らは、日詰以北でのこの段丘面は二枚橋段丘が削剥されて生じた侵食面であるとし、花巻段丘と呼んで峻別している。

杉ノ上Ⅰ、杉ノ上Ⅱ、杉ノ上Ⅲの3遺跡は中位段丘上に立地する。前記のように、第Ⅱ図の地形分類図は日詰以北においては花巻段丘と二枚橋段丘を中位段丘として同一面で図示しているが、これらの3遺跡は二枚橋段丘面に相当する。

田頭、大日堂の2遺跡は低位の段丘である都南段丘上に立地する。

大銀遺跡は河岸低地上の微高地に立地するが、調査の結果盛土であることが判明している。

野上遺跡は北上川の東岸に位置し、北上山系からのびる丘陵縁辺部の低位段丘に立地する。この低位段丘は西岸の低位段丘である都南段丘との対称性は認められない。

注1. 中川久夫ほか「北上川中流沿岸の第四系および地形」『地質学雑誌』第69巻第812号 1963。

注2. 紫波地区の段丘区分に際しては高橋文夫氏が作成した地形面区分図を参照した。

高橋文夫「Ⅲ地形・地質」『都南村湯沢遺跡』(財)岩手県埋蔵文化財センター 1978。

注3. 第Ⅱ図の面区分による中位段丘であり、中川氏らのいう低位の花巻段丘に相当する。

なお、第Ⅱ図の地形分類概念図は岩手県企画開発室発行の北上山系地域土地分類基本調査「花巻」を参照した。

## 2. 周辺の遺跡

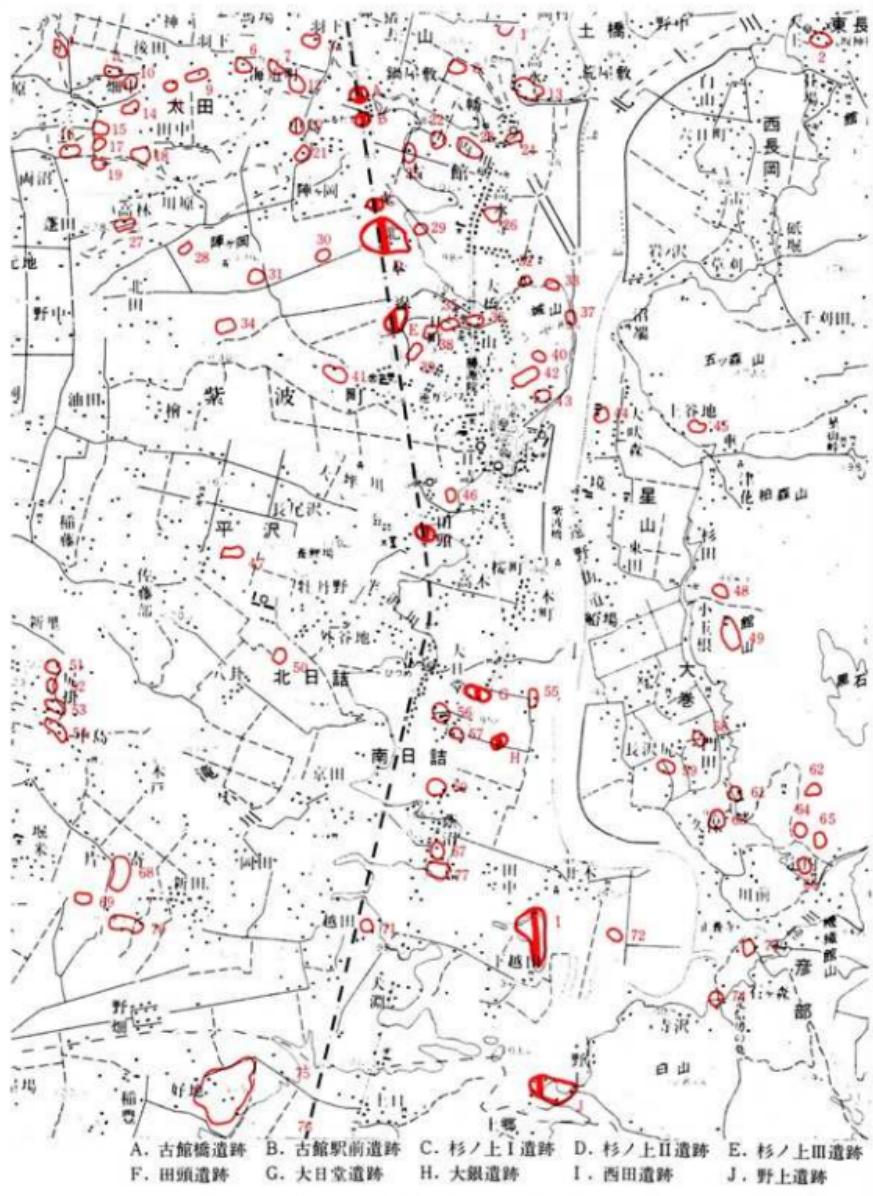
第Ⅲ図に示した図幅に含まれる遺跡の数は現在86確認されている。該地は紫波地区の北上川沿岸沿いの限られた範囲であり、東側に丘陵地帯を部分的に含むほかは扇状地性の段丘群と河岸低地で占められている。

縄文時代の遺跡は図幅に含まれる地形上の制約から相対的に数が少ない。時期は中期・後期のものがそのほとんどを占めている。このなかで発掘調査されたものとしては次年度報告にな

る西田遺跡が代表的なものである。この遺跡は中期の大集落址であり、多くの遺構・遺物が発

見されている。また野上遺跡も同時期の集落として注目されている。地形的にみるならば、中期の遺跡は丘陵の緩斜面や舌状台地の突端に立地するものが多い。後期の遺跡は分布調査においてかなりの数が報告されているが、発掘調査されたものがなくその実体は不明である。

弥生時代の遺跡は発見されてはおらず、縄文時代に後続するのは古代も平安時代に属するものと思われる遺跡になる。平安時代の遺跡はかなりの数が確認されているが、これもまた正式な発掘調査が行なわれたものではなく、ほとんどが包含地として登録されている。本報告にかか



第III図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第Ⅲ表

## 周辺の遺跡地名表

番号	名 称	時 代	番号	名 称	時 代
1	岡 村 遺 跡	平 安	40	二 日 町 吉 兵 衛 遺 跡	繩文(中期)
2	東 長 岡 · 天 王 遺 跡	繩文(後期)	41	七 久 保 遺 跡	平 安
3	北 郡 山 遺 跡	平 安	42	吉 兵 衛 館 遺 跡	中 世
4	長 根 遺 跡	繩文 · 平 安	43	日 詰 · 石 田 遺 跡	平 安
5	太 田 田 遺 跡	平 安	44	間 木 沢 遺 跡	繩文(後期)
6	太 田 田 遺 跡	平 安	45	犬 呴 森 遺 跡	繩文(後期)
7	太 田 田 遺 跡	土 師	46	日 詳 · 牡 丹 野 遺 跡	繩文(後期)
8	北 郡 山 遺 跡	平 安	47	平 沢 境 田 遺 跡	平 安
9	太 田 田 遺 跡	平 安	48	花 立 遺 跡	繩文(中期)
10	太 田 田 遺 跡	繩 文	49	大 卷 遺 跡	中 世
11	杉 下 遺 跡	平 安	50	北 日 詳 · 外 谷 地 遺 跡	繩文(中 · 後期)
12	太 田 田 遺 跡	平 安	51	土 誰 尻 掛 遺 跡	繩文(中 · 後期)
13	高 水 田 遺 跡	平 安	52	尻 掛 カ ワ ラ バ 遺 跡	繩文(中 · 後期)
14	太 田 田 遺 跡	繩文(早 · 前期)	53	尻 掛 V ~ VII 遺 跡	繩 文
15	太 田 田 遺 跡	平 安	54	片 寄 中 島 遺 跡	平 安
16	西 沼 遺 跡	繩文(平安)	55	小 路 口 遺 跡	平 安
17	西 沼 遺 跡	繩文(早 · 前期)	56	志 和 城 沢 擬 定 遺 跡	平 安
18	太 田 遺 跡	平安 · 中 世	57	五 郎 沢 遺 跡	繩文(中 · 後期)
19	三 合 島 遺 跡	平 安	58	大 卷 間 田 尻 遺 跡	平 安
20	中 島 城 遺 跡	平 安	59	大 卷 長 沢 尻 清 水 遺 跡	繩文(後期)
21	中 島 田 遺 跡	中 世	60	南 日 詳 箱 蛇 塚 遺 跡	平 安
22	中 田 遺 跡	平 安	61	彦 部 小 学 校 坂 古 費 遺 跡	繩文(後期)
23	中 田 遺 跡	平 安	62	彦 部 赤 保 遺 跡	平 安
24	稻 村 遺 跡	平 安	63	彦 部 久 館 遺 跡	中 世
25	念 仏 堂 遺 跡	平 安	64	彦 部 部 遺 跡	安 世
26	古 里 教 原 遺 跡	平 安	65	彦 部 部 遺 跡	繩文(中 · 後期)
27	太 田 川 館 遺 跡	繩文(後期)	66	彦 部 部 遺 跡	江 戸
28	久 々 田 遺 跡	平 安	67	藤 沼 一 里 塚 遺 跡	繩文(平安)
29	新 沼 一 遺 跡	繩文(後期)	68	土 手 田 · 片 寄 I ~ III 遺 跡	繩文(後期)
30	蓮 沼 一 遺 跡	平 安	69	片 寄 野 烟 遺 跡	平 安
31	陣 沼 一 遺 跡	繩文(後期)	70	四 ツ 目 I ~ IV 遺 跡	繩文(中 · 後期)
32	清 水 寺 遺 跡	繩文(中 · 後期)	71	片 寄 越 田 遺 跡	平 安
33	御 堂 前 遺 跡	平 安	72	甘 木 下 川 原 遺 跡	繩文(中 · 後期)
34	柳 原 遺 跡	平 安	73	元 町 遺 跡	平 安
35	善 念 寺 山 古 費 塚 遺 跡	繩文(後期)	74	小 深 田 遺 跡	繩文(中期)
36	北 七 久 保 一 里 塚 遺 跡	江 戸	75	燒 熊 場 遺 跡	平 安
37	河 岸 場 遺 跡	平 安	76	野 場 遺 跡	平 安
38	善 念 寺 山 遺 跡	繩文(後期)	77	知 鳥 館 遺 跡	平 安
39	北 七 久 保 遺 跡	平 安			

わる新幹線関連遺跡はすべて該期のものであり、その大半が集落址となることが判明している。したがって包含地とされている遺跡の中に集落址がかなり含まれている可能性が強い。

古代に属する館跡としては安倍氏関係の城柵として伝えられる善知鳥館があげられる。この遺跡は現在では原形をとどめてはいないが一度発掘調査されており、古代の居館跡として明らかにされているものである。<sup>(注4)</sup>

中世の遺跡としては河村、斯波氏にかかわるものと想定されるいくつかの館跡が確認されている。

注1. 岩手県の『埋蔵文化財地図』と『紫波町史』を参照した。

岩手県教育委員会『埋蔵文化財地図』 1974

佐藤正雄「第1編先史時代」「紫波町史」第1巻 1972

注2. 岩手県教育委員会「西田遺跡－東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報一」 1978

注3. 本報告にかかる野上遺跡は、縄文時代中期の集落址が乗る丘陵に取付くかたちで形成された段丘面を調査したものである。

注4. 坂橋 源『岩手県紫波町善知鳥館調査報告書』紫波町教育委員会 1963。

# の 野 上 遺 跡

遺 跡 記 号：NG

所 在 地：紫波郡紫波町彦部字野上18-4 他

調 査 期 間：昭和49年10月17日～10月29日

調査対象面積：2400m<sup>2</sup>

平面実測基準点：東京起点 471.487km (BA50)

基 準 高：海拔97.50m



## 1. 遺跡の位置と環境（第Ⅱ図P12、第Ⅲ図P14）

野上遺跡は紫波町彦部字野上地内に所在し、紫波町の中心部（日詰）より直線にして南東約5km、また石鳥谷町の中心街より北東約2.2kmに位置する。

遺跡は東より西に向けて舌状に張り出した丘陵地の先端に形成された小規模な低位段丘の縁辺部に立地し、遺跡の南約0.2kmには石鳥谷町と紫波町の境をなす小河川が西流する。遺跡の現状は県道彦部東和線により東西に二分され、東側は標高102～102.4mでほぼ平坦、地目は水田と畠地それに一部宅地となっている。一方県道の西は二段の畠地となっており、高い畠は標高約98～100mで北へ向けて緩傾斜を示し、低い方の畠は約96～97mの標高を測り、西に向けて緩斜面を形成する。遺跡の立地する段丘の先端は北上川に臨み、南と北側は水田地帯として拡がっている。周囲の水田面との比高はおよそ9～10mを測る。

なお東北新幹線は西へゆるいカーブをしながら、当遺跡より北上川を渡り国鉄東北線へと接近していく。北上川を渡った北方約1.5kmの新幹線ルート内には西田遺跡がある。

## 2. 調査の方法と経過（第1図）

本遺跡は東北新幹線建設事業にともなって昭和47年に実施した路線敷内の遺跡分布調査以前の県道改修工事の際、遺物の出土があり縄文時代中期の遺跡として周知されていた場所である。この県道改修工事の結果遺跡は東西に二分され、そのうち西側部分が新幹線用地にかかり今回の調査に至った。

調査はグリッド設定にかかる測量と雑物の伐採作業より着手した。グリッドの設定にあたっては新幹線の中心杭東京起点471.460kmと471.480kmの二点を結ぶ直線とその延長を遺跡の中心軸に定め、471.487kmの地点を本遺跡の基準点（BA50）とした。このBA50を基点にして一辺3mのグリッドをくみ市松状に表土を除去して遺構の探索につとめた。

発掘作業はB区の畠地部分（低い方の畠地）を中心に実施し、竪穴住居跡一棟を検出した。その他遺構外よりは縄文土器の破片が出土した。

### 3. 調査の結果

#### 〔1〕 遺跡の基本層位(第2図)

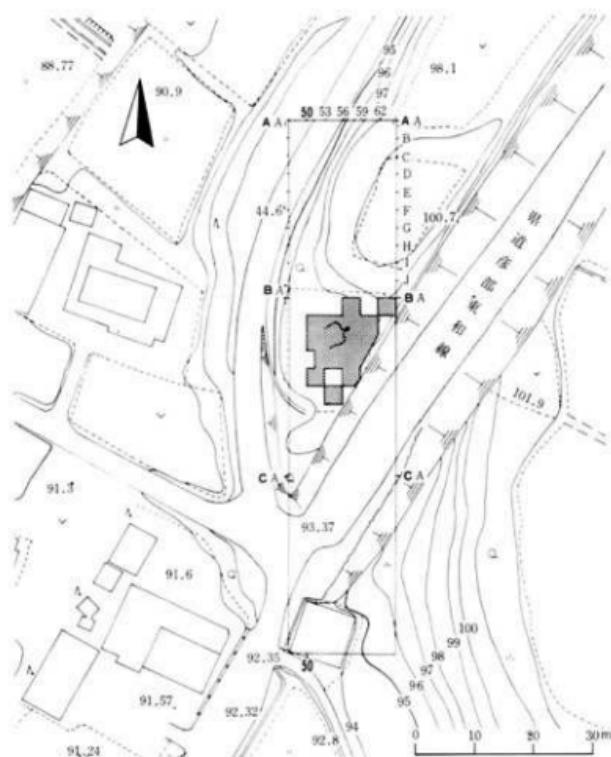
遺跡の基本層位を知るためAJ56、BC56の各グリッド2箇所に深掘りを実施した。その結果今回調査対象となった西側の畠地部分には開田工事の際の土が東側から大量に移動していたことがわかった。

以下深掘りの断面観察により層位をみると次のようになる。

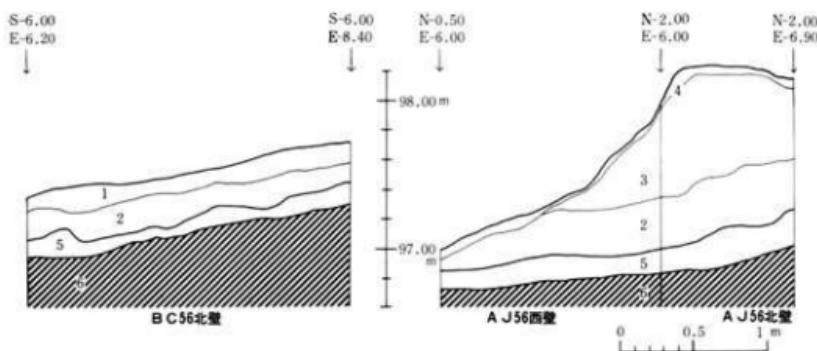
第Ⅰ層：開田時の盛土でa～dの4層に区別される。a層は暗褐色を呈した現在の耕作土で層厚は10～15cmを測る。炭化物・焼土粒を混入し土器片や小礫及び黄褐色土(地山)も若干塊

状に包含する。b層も東側からの盛土で黒褐色を呈する。包含物はa層と同様であるが、土器片は繩文土器を主体に土師器、須恵器が若干混同する。いずれも細片である。c層は黄褐色の地山の盛土で層の逆転を示す。礫を含み遺物は皆無。d層は盛土後草木が生育し表土となっている部分である。

第Ⅱ層：黒褐色(7.5YR 3/2)土でI層のbと区別をつけ難いが割合にしまりが良い。層厚



第1図 野上遺跡グリッド配置図



第2図 土層図

は15~20cmを測り、西に傾斜している。若干の焼土・炭化物を混入した遺物包含層である。遺物は土師器を主体として出土する。

第Ⅲ層：黄褐色(10YR5/6)土で礫を含むシルト質粘土(地山)である。なおAJ56グリッドの西壁と北壁の観察によるとかなりの厚さで盛土がなされ、上段の畑地は盛土によったものと思われる。上段の畑と下段の畑地とは3~3.5m程の比高を測る。

## (2) 発見された遺構と遺物(第3図、第4図)

調査の結果1棟の竪穴住居跡を検出した。

### 土層図注記

	層 12	土色	様子	層 13	層 12	土色	様子
(1) 竪穴住居跡	1 14	暗褐色(7.5YR5/6)土 柱穴付近	柱穴の跡付近、炭化物、焼土 柱穴付近	1 14		5 14	5 14
BB50住居跡	2 16	黒褐色(7.5YR5/6)土 柱穴付近	柱穴付近と同じであるか 下段の畑	5 15	5 16	5 15	5 15
	3 15	黄褐色(10YR5/6)土 シルト質粘土 地山の盛土	シルト質粘土 地山の盛土	6 15	6 15	6 15	6 15

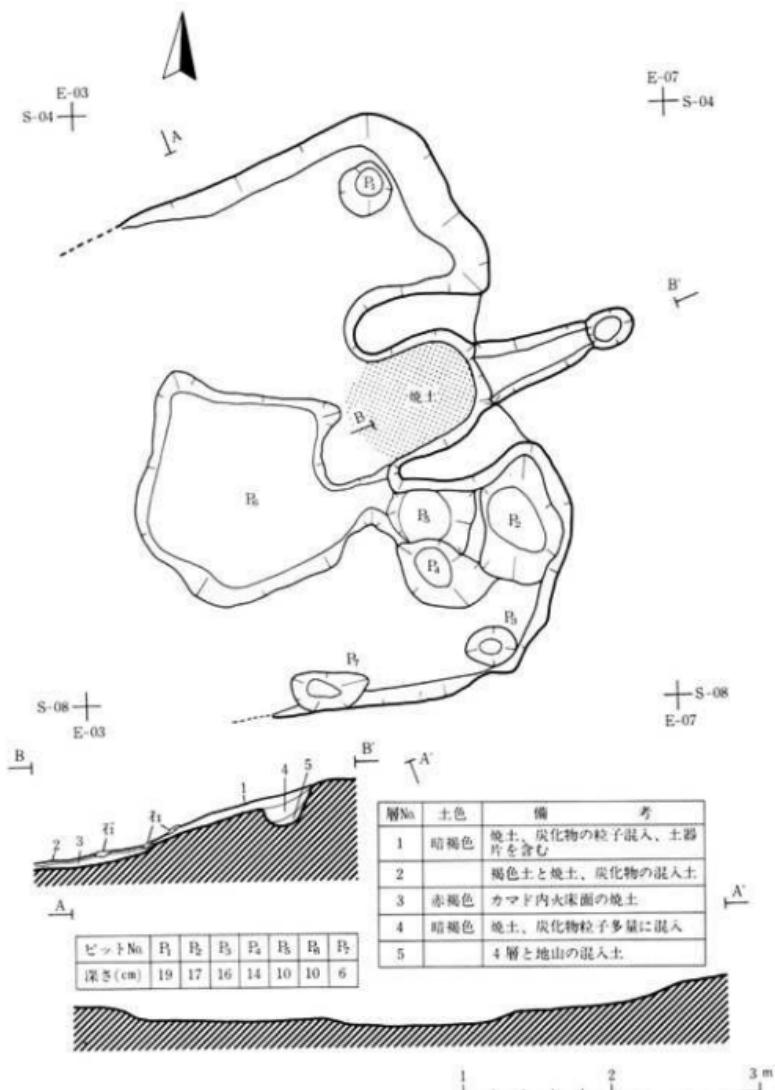
〔遺構の確認〕 遺構の検出確認面は第Ⅲ層の地山面である。この住居跡は緩斜面に構築されたため西半分の壁は確認できなかった。

〔平面形、規模〕 西半分が消滅しているため全体の規模は不明であるが、残存部から推定すると隅丸の方形を基調としたと考えられる。南北長は約3.7mである。

〔壁、床〕 地山を壁としており、傾斜地のため残存壁高は東側が高く約30~35cmを測る。西側は消滅していて不明。床も黄褐色の地山を使用し、ほぼ平担である。貼床、周溝は認められない。

〔柱穴〕 カマド付近および東側に沿って数個のピットが認められるが、柱穴と考えられるピットはP<sub>1</sub>とP<sub>3</sub>の2個である。

〔カマド〕 東壁中央に煙道をともなってとりつけられている。燃焼部には60×100cm程の範囲



第3図 BB50住居跡平面図

で焼面が検出され、かなりよく焼土化していた。燃焼部より煙道へは若干の段差をもって移行し、煙出部は煙道底面より10cm程の落ち込みとなっている。煙道は自然の傾斜を利用して構築されているため、約15°程の傾斜で上向きに移行する。煙道の長さは約80cmを測る。カマドの軸方向はN-67°30'-Eである。

〔その他ピット〕 カマド付近に集中して数個のピットが検出されたが、そのうちカマド南側に検出されたP<sub>2</sub>は貯蔵穴と考えられ、遺物も出土している。径約70×50cmの不整円形を示し床面からの深さ約17cmを測る。その他のピットについては不明である。

〔出土遺物〕 当住居跡の上部は大半が削平されており、結果的に出土遺物はほぼ床面の出土となる。平面的にはカマドの焚口付近および貯蔵穴(P<sub>2</sub>)の内部より出土したものが殆どを占めている。その内容は土師器・須恵器および赤焼土器からなっており、器種には壺と甕がある。

#### 土師器

壺 出土個体数は14点となるが、そのほとんどは小破片である。底部の残っているもの5点のうち、2点は体部下端より底部全面にヘラケズリを施している。

第4図1：口縁部を欠き全体の器形は不明である。底部から体部にかけてはかなり丸みをもつて外傾している。体部は内外面とも極めて丁寧なヘラミガキで調整されており、底部外面は全面にヘラケズリが施されている。内外両面に黒色処理されている。

第4図2：底部から口縁部までややふくらみをもって立ちあがり、口径に比べて器高の高いものである。内面は刷毛状工具によるナデと荒いヘラミガキで調整したのち、黒色処理が施されている。外面は体部がナデ、体部下端より底部全面がヘラケズリの調整となる。

甕 甕にはロクロを使用していないものと使用しているものとに分けられる。

前者はすべて大形のもので、破片をも合わせて10個体分出土している。口縁部を残す破片は、口径より器高が大きく最大径の位置が口縁部にあるものに限られる。口縁部の形態は、単純に外傾するものがそのほとんどを占めるが、ほぼ直立し頭部のくびれがあまりみられないものも1点含まれる。

ロクロを使用しているものは、大形のものと小形のものとに二分される。大形のものはすべて口径より器高が大きいもので、最大径の位置は口縁部にもつものと体部にもつものとがある。口縁部の形態は外傾するものに限られるが、その強弱は一定しない。調整は体部の下半外面にヘラケズリを施すものが多い。小形のものはすべて最大径の位置を口縁部にもつもので、器形が近似している。内外ともロクロナデ以外の調整は加えられていない。底部の破片には糸切り痕をそのまま残している。

第4図5：ロクロを使用していない長胴形の甕である。最大径の位置を口縁部にもつもので、口縁部は比較的強く外傾する。器面は口縁部が内外面とも横ナデ、体部外面がナデ、内部がヘ



第4図 BB50住居跡出土土器実測図

ラナデで整えており、極めて荒い仕上げとなっている。

第4図6：ロクロを使用しているもので、最大径の位置は体部の中央付近にある。口縁部は短く外傾するが、口唇部は強く上方へ引き出している。口縁部は内外面ともロクロナデ、体部上半は外面が手持ちのヘラナデ、内面がヘラ状ロクロナデ、体部下半は外面がヘラケズリで調整している。

第4図7：口縁部に最大径をもつものである。口縁部は短く外傾し、口唇部は上方へ引き出している。体部はふくらみが少なく、やや直線的になる。全面ロクロナデで仕上げている。

第4図10：口縁部の小片である。口縁部は短く外傾し、口唇部は弱く下方へ引き出している。調整は内外面ともロクロナデの痕跡以外は認められない。

第4図8：口縁部から体部の上半を欠く。粘土積み上げの痕跡を残すが、内面の一部にロクロ整形痕が認められる。外面はミガキに近い丁寧なヘラケズリ、内面はロクロナデで調整している。底部外面には幅の広いヘラケズリが施されている。

第4図9：小形の甕である。口縁部は短く外傾し、口唇部は強く上方へ引き出している。内外面ともロクロナデの痕跡をそのままとどめている。

#### 赤焼土器

壺 当住居の環形土器の大半を占めているにもかかわらず細片による出土であることから、全体の器形を知りえるものは少ない。

第4図3・4：ともに底部から口縁部にかけてやや丸味をもって外傾するもので、かなり大形のものである。内外面ともロクロナデで仕上げており、二次調整は加えられない。底部には右回転糸切痕をそのまま残している。

#### 須恵器

壺 6個体分出土しているがすべて細片のため図示できない。底部片は1点出土しており糸切り無調整のものである。

甕 1個体分は大形のもので、内外とも平行タタキで器面をととのえている。ほかに、体部下半から底部にかけてヘラケズリを施すものが1点出土している。

壺 壺と思われる体部片が2個体分出土しているが、特徴的なことがないため詳細は不明である。小形の甕となる可能性もある。

注1. ここで赤焼土器としたものは、土師器にみられる内面へのヘラミガキ、黒色処理などが加えられておらず、須恵器の還元炎焼成とは異なり酸化炎によって焼成されたものである。

本遺跡出土のものは色調が黄褐色ないし橙色を呈し、内外面とも再調整は認められない。

第1表

図示遺物観察表

図版番号	種別	器種	出土状況	遺存状況	色調	胎土	焼成	器面				調査部				写真番号
								外	内	外	内	外	内	下部	上部	
第4回 1	土師器	有	かまど焚口付近	黒色	外にない	砂粒を少く含む	普通	ロクロ ナデ	ヘラ ミガキ	ヘラ ミガキ	ヘラ ミガキ	ヘラ ナデ	ヘラ ナデ	ヘラ ナデ	ヘラ ナデ	口徑(15.2) 器高 6.3 底径(7.5)
第4回 2	土師器	有	床面(南東部)	内黒色	外にない	砂粒を含む	普通	ロクロ ナデ	ヘラ ミガキ	ヘラ ミガキ	ヘラ ミガキ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	口徑(15.2) 器高 4.8 底径(6.9)
第4回 3	赤焼 土器	有	床面(西部)	内にない	赤色	砂粒を含む	やや 良い	ロクロ ナデ	口徑(15.2) 器高 4.8 底径(6.9)							
第4回 4	赤焼 土器	有	住居覆土(南東部)	浅黄褐色	砂粒を含む	やや 不良	ロクロ ナデ	口徑(14.4) 器高 4.7 底径(5.1)								
第4回 5	土師器	無	ピット2埋土	外浅黄褐色	砂粒を多く含む	やや 不良	構ナデ	構ナデ	ヘラ ナデ	口徑(24.2) 底径 不明 底径(20.9) 器高(16.4) 軸径(21.9)						
第4回 6	土師器	變	有	かまど焚口付近	内にぶついた黃褐色	砂粒を含む	普通	ロクロ ナデ	口徑(24.4) 底径 不明 底径(21.4) 器高(14.8) 軸径(25.9)							
第4回 7	土師器	變	有	かまど焚口付近	外にない	砂粒を含む	やや 良	ロクロ ナデ	口徑(21.8) 底径 不明 底径(20.9) 器高(15.0) 軸径(20.0)							
第4回 8	土師器	變	有	ピット2埋土	内にない	砂粒を多く含む	普通	ロクロ ナデ	口徑(12.8) 底径 不明 底径(10.9) 器高(15.4) 軸径(15.0)							
第4回 9	土師器	變	有	床面(南部)	浅黄褐色	砂粒を含む	普通	ロクロ ナデ	口徑(16.4) 底径 不明 底径(15.3) 器高(3.7) 軸径 不明							
第4回 10	土師器	變	有	かまど焚口付近	明黄褐色	砂粒を多く含む	やや 不良	ロクロ ナデ	口徑(22.9) 底径 不明 底径(19.6) 器高(5.5) 軸径 不明							

図示遺物観察結果の( )は復元推定値、( )は現存値を表わす。

第2表

BB50住居跡出土土器個体数

			口 縁 部	体 部	底 部
土 師 器	壺	ロクロ使用	4(5)	3(3)	5(5) 3. 糸切痕 2. 糸切→ヘラケズリ
	甕	ロクロ不使用	2(8)	$4(18) + \alpha$ $0 < \alpha \leq 8$	1(1) ナデ痕(?)
	甕	ロクロ使用	大形 3(4)	$6(24) + \alpha$ $0 < \alpha \leq 12$	
赤焼土器	壺	ロクロ使用	小形 3(5)	$3(16) + \alpha$ $0 < \alpha \leq 3$	1(2) 糸切痕
	壺	タ	12(17)	16(23)	4(10) 糸切痕
	甕	タ	4(10)	1(2)	1(2) 糸切痕
須 恵 器	甕	タ		2(4)	
	甕	タ		1(3) 内外面とも平行タタキ	1(1) ヘラケズリ

注1. ( )内の数字は破片数を表す。

2. 口縁部～底部片、体部～底部片は、底部の個体数に入れてある。

3. 甕の体部片の分類は、正確性を欠いているくらいがある。

4. 図示遺物は除いてある。

## (2) 遺構外出土土器（第5図）

第5図の縄文土器片は表土（盛土）中に包含されていたものであり、原出土地点は必ずしも本遺跡地内とは限れないものであるが、周辺遺跡を知る上での資料紹介として掲載した。大部分は深鉢の破片と思われるが、全体形を推定できる土器は出土しなかった。焼成は堅く良好なものが多いが、一様に器面の磨滅あるいは剥離を受けている。

5図1～14は深鉢口縁部片、15以下は体部片であるが、1～6、12などキャリバー形を呈すと思われるものが多い。1は3と同一個体と思われる所から、口縁に原始的な渦巻文を配し、大波状の口縁形をなす大きな深鉢であろう。文様帶内の隆線は無調整の細い粘土紐貼り付けによっている。地文はLR単節縄文縦回転。2はやはり波状口縁若しくは山形口縁をなし、口縁上部に初源的な渦巻文が施されている。文様加飾は隆線+沈線による。11と酷似。4は1に類似する深鉢の小片で、地文はRL単節である。5は深い沈線により加飾され、地文はRLR複節。6は口縁部文様帶の上下の隆線間に縦方向の沈線が刻みこんでいるもの。7・8は口縁部文様として縄文原体が押捺されている土器群である。10は粘土紐貼り付けの上を沈線状にナデられた隆線により描かれているが、やはり渦巻文であろう。12はキャリバー形の比較的小形の深鉢片である。口縁部文様帶は粘土紐貼り付けにより棘状突起を有する渦巻文が横方向に展開している。貼り付け文の剥落痕を見ると、施文手順は地文回転→粘土紐貼付となっている。頸部には3本の沈線が横にめぐる。地文はRL単節縄文である。13は口縁部に渦巻文が形成され



第5図 拠文土器片拓影図

ている。焼成は不良で軟質である。14は口縁部に粘土紐を波状に貼り付け、下方は沈線及び隆線文が施されている。

15以降は体部片で、15~33は沈線及び隆線による施文が行なわれている。このうち15・18・25・26は隆線のみの施文、16・17・20は隆線+沈線による施文、22・23は隆線+縄文原体压痕による施文、他は沈線のみの施文となっている。小破片のため文様意匠は不明だが、26・29・30・31は渦巻文の一部であり、27・33は直線及び破線の懸垂文が描かれている。

34以降はやはり深鉢の体部片だが、施文がなされていない。施文は36がRL単節縄文、47・39・40がRLR複節縄文、他はLRの単節縄文である。

以上の観察の結果から、これらの土器類はすべて縄文時代中期の特徴を有するものと判断できた。渦巻文の状態、粘土紐の貼り付け方法等々の点から鑑みると、1・3・6・8・14は大木8a式に、12・13・27~33の体部片は大木8b式土器に相当すると考えられる。

#### 4. 考察とまとめ

本遺跡は過去の耕地整理による東側の水田化、それに県道改修工事等による攪乱が手伝って旧地表の変容がみられ、西斜面（今回調査対象となった部分）には大量の盛土もみられ、遺構の遺存状態は悪い。今回の調査区域には1棟の竪穴住居跡の発見だけにとどまった。以下出土遺物を中心に若干の考察を加えてみよう。

＜BB50住居跡＞この住居跡から出土した土器には壺・甕の器種がみられた。壺には土師器・須恵器と赤焼土器があり、赤焼土器壺がその出土量の大半を占めている。それに伴う土師器壺は体部下端より底部全面にかけて手持ちのヘラケズリを施すものである。須恵器壺も若干出土しているが、すべて小破片に限られる。底部の破片には糸切痕をそのまま残している。

土師器甕では、ロクロ不使用のものと使用的のものが混在している。ロクロ整形の長胴甕は口縁部に最大径をもち、やや直線的な体部形態を示すものが殆どであり、ほかに体部に最大径をもち丸味をもった体部形態を示すものが1点含まれる。後者のものは体部上半にヘラ状工具で調整を加えている。ロクロ成形の小形甕も共伴しており、底部には糸切痕をそのまま残している。須恵器では大甕の体部片が出土しており、内外に平行タタキの痕跡をとどめている。

以上のような内容をもつ出土土器を壺についてみれば、土師器では底部および体部下端あるいはそのどちらかに再調整を施す壺が主流となる段階に比定され、須恵器では糸切り無調整の壺が主体的に量産される直前の段階に位置づけられよう。こうした段階における壺の出土状況は当住居跡と同様に赤焼土器がかなりの出土比率を占める傾向にある。<sup>(注1)</sup>

土師器壺では、ロクロ未使用のものも含まれるが、ロクロ調整の長胴壺が主流を占めている。これは、製作技法の変遷のみを問題とすれば、その初源的な様相をとどめてはいるもののロクロ技術が普及した段階をすでに経ていることを示している。

当住居の営まれた年代に関しては具体的な資料に乏しく、明確にし得ない点も多いが、前記の出土遺物の概観と今までの研究成果から9世紀後半に属するものと想定しておく。

最後に今回の調査結果を要約すると次のようになる。

- ① 本遺跡は小規模な河岸段丘の西縁部に立地した遺跡である。
- ② 今回の調査によって発見された遺構は竪穴住居跡1棟に限られた。これは平安時代の初め頃に属するものである。
- ③ 発見遺構は西に向かう緩斜面に構築された竪穴住居跡である。
- ④ 少量ではあるが縄文土器の破片も出土した。すべて盛土中からの出土で縄文時代中期に属するものである。盛土は東側開田時のものである。
- ⑤ 県道の西側部分は新幹線工事に伴ってすべて削平され消滅してしまった。

注1. 高橋信雄「岩手県のロクロ使用土師器について」『考古風土記』第2号(1977)。

高橋氏は北上市相去遺跡における环形土器の種別ごとの出土割合から、その前後関係を想定している。なお、本遺跡で赤焼土器としたものは環B<sub>1</sub>類として説明している。



# 大銀遺跡

遺跡記号：DG

所在地：紫波郡紫波町南日詰字小路口61他

調査期間：昭和50年4月10日～4月26日

調査対象面積：960m<sup>2</sup>

平面実測基準点：東京起点474.200km (BA50)

基準高：海拔94.20m



## 1. 遺跡の位置と環境（第Ⅱ図・P12、第Ⅲ図・P14）

大銀遺跡は、紫波町南日詰字小路口に所在し、東北本線日詰駅東南約900m、国道4号線と北上川とのほぼ中間の標高94mの微高地である。遺跡は、北上川流域の河岸低地に形成された自然堤防上にあり、宅地・畠地として利用されている。周辺は主として水田・畠地となっており、遺跡は水田面との比高が約1mである。

周辺には比爪館跡など遺跡の分布が数多く確認されているが、発掘調査及びその報告がなされているところが少ないので、相互の関係把握のための調査が今後の課題である。（第Ⅲ表）

## 2. 調査の方法と経過

本遺跡は、東北新幹線建設事業の施行に伴って、昭和47年に実施した遺跡の分布調査の結果発見された遺跡で、若干の土器が表面採集された。調査は、路線敷内の遺跡全体を対象に約960m<sup>2</sup>を1辺3m×3mのグリッドを設定し、市松状に表土を除去し、遺構・遺物の検出につとめた。作業は宅地跡の雑物撤去と礫まじりの固い土質のため困難をきわめた。

## 3. 調査の結果

### [1] 遺跡の基本層序（第1図）

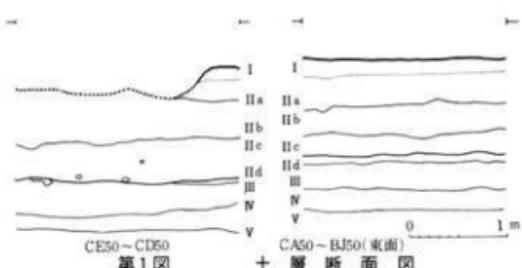
BJ50～CA50グリッド深掘りの東西壁の土層断面（第1図）を観察すると、次のようなになる。

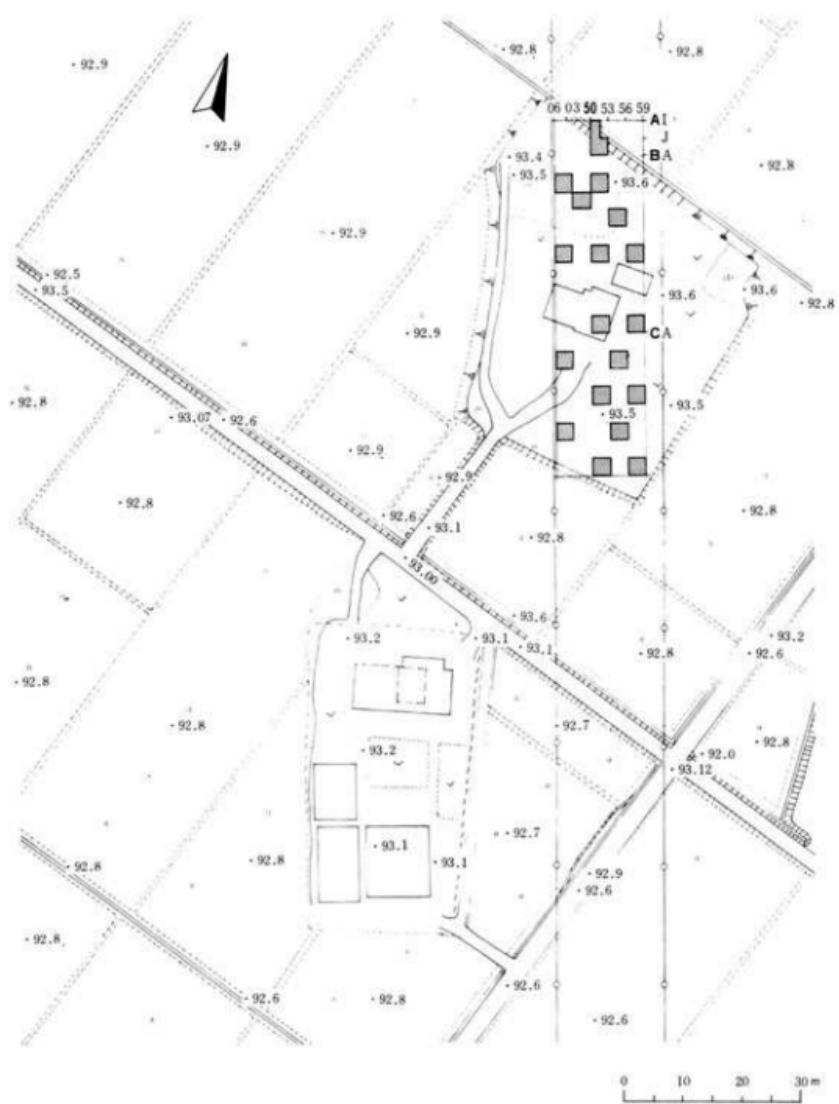
第Ⅰ層は表土、第Ⅱ層は盛土で、Ⅱa～Ⅱdに区分することができる。古老の話から各層の盛土年代は次のようである。

Ⅱa層（10年前、北水田面  
—旧宅地跡—の土をブルドー  
ザーで積み上げたもの）。

Ⅱb層（50年前、南水田面  
—旧畠地—の土をトロッコで  
積み上げたもの）。

Ⅱc層（Ⅱbと同じ場所か





第2図 グリッド配置図

らの盛土)。

Ⅱ d 層 (60年前、家主一平井氏一の終り頃の生活面。土器片はⅡ b ・Ⅱ c 層から出土する)。

第Ⅲ層はシルト層であるが、炭化片などが含まれ、砥石も出土したが、耕作などによって動かされている。第Ⅳ層はシルトが若干含まれる砂層で、遺物は出土しない。第Ⅴ層は砂礫層となる。表土から約160cmである。

次に、CE50～CD50グリッド深掘りの東面壁の土層(第1図)を観察すると、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層盛土はCA50～BJ50グリッドの土層と同じであるが、盛土下の第Ⅲ層シルトは粘性のあるシルトで、かなりドロ臭く、湿地性の植物遺体(ヨシ)もみられる。これらの点からこのCE50～CD50グリッドは微高地の南端に当たり、盛土前は湿地状の地形であったことが考えられる。

## 〔2〕発見遺構と遺物

調査の結果、遺構は検出されなかったが、土師器を中心とした遺物が少量発見されただけである。しかも、これらの遺物は小片で接合できたものではなかった。出土した遺物には、土師器、須恵器、赤焼き土器、砥石などがあるが、以下、主なる遺物について記述する。

### 赤焼き土器(第3図 1～6、写真図版2-2)

1、2、3はほぼ同じ器形、調整であるが、口唇部は平面をなしている。

3は約士の残存部があり、口縁部、体部、底部が観察できる。口径13cm、器高3.5cmと推定される。底部は丸味をもち、そのまま内弯しながら立ち上がる。体部に一段の強い段があり、更に口縁部に浅い沈線がある。口唇部は内弯しながら丸くおさまる。器厚は全体に厚く、底部で約1cm、体部で約6mmを測る。色調は橙色(5YR%)で、焼成は硬質である。

4は、前述の1、2、3と比べ、薄手で体部の段もない。口唇部も丸くおさまり、全体として浅い皿型の器形とも考えられる。器面の内外に油煤と思われる付着物が認められる。1～4はいずれもロクロ使用で成形されている。胎土はシルト質土である。

5、6は小片で推定値は出ないが、いずれも1～4の器形と同じ環型土器である。特に5は口唇部が器内に比して厚く、内弯が強い。胎土は砂粒が多く、石英も含まれる。

### 土師器(第3図・7、写真図版2-4)

小型壺の底部である。底部径は5.5cmであるが、他の数値は不明である。胎土は砂粒が多く、粗い胎土であるため、磨滅が著しい。わずかに底部切離し痕は回転糸切りであることが確認できるだけである。土師器片はこの他に若干出土しているが、前述のように小片であるため器種個体数など確認できない。

#### 須恵器（第3図・8～11、写真図版2-4）

4片出土したのみである。8、9は壺片である。叩き目文、あて工具などの痕跡がみられる。11は环体部破片である。底部からほぼ直線的に立ち上がり、口唇部でやや外反する。口縁部外面に自然釉が見られる。体部下半の一部にヘラケズリ痕が見られる。また、壺肩部破片が1片出土している。肩部下半に軽いヘラケズリ痕がある。他の調整痕は小片のため不明である。

#### 砥石（第3図・12～14、写真図版2-5～7）

3点出土した。12はBB06の地表より60cm下（盛土IIb層）、13、14はBJ50の地表より約100cm下（盛土IIc層）よりそれぞれ出土した。いずれも石材は、淡緑色流紋岩質凝灰岩である。12は直方体状で、表・裏・側面に砥磨面がある。13も直方体状で表裏2面と側面2面の4面に砥磨面がある。特に、表1面はよく使用され、くぼんでいる。巾1mm弱の溝が多数走る。14は欠損部が大きく、現存最大長約10cmで、破損面を除く平坦部2面は使用されており滑らかである。

これらの砥石は、土師器片などの遺物を伴って出土しているが、いずれも、盛土からのものであり、その使用時期については明らかでない。

## 4.まとめ

今回の調査で遺物の出土する層は、盛土層からのものと判明したが、出土遺物の中に赤焼き土器がみられ、その器形が特徴的なものであることに注目したい。この赤焼き土器の环は、割に浅く器肉も厚手であること、底部に丸味があり、体部に段があることも特徴である。この环と同型のものが、平泉の無量光院跡、毛越寺などからも出土している。特に、無量光院跡出土の土器（『無量光院跡』111ページ、第39図-4）は口径・器高共に類似し、底部の丸み、体部のくびれなど極めて同型のものと思われる。また、毛越寺出土の土器（『平泉』142ページ、第124図-10）はロクロ挽きの成形で口径に段をもつ丸底で、口径3.05寸、高さ0.8寸、厚さ0.2寸と記されている。大銀遺跡出土のNo.3よりは若干小さいが、器形に類似性が認められる。また、胎土の色調にも共通性がみられる。したがって、これらの出土土器から平安末期の遺構が付近に存在している可能性を考えられる。

前記の比爪館発掘調査報告書では、この大銀遺跡より西約0.5kmに所在する赤石小学校校庭西隣の調査結果として、同地点を「比爪館跡」として考定することが最もふさわしいとしている。さて、ここで比爪氏とその居館について若干ふれてみたい。

比爪氏は「吾妻鏡」に植爪とも記され、源頼朝の平泉征討による平泉滅亡の一哀史として記述されている。比爪氏は平泉藤原氏の近親有力支族であり、俊衡・季衡らの父を清綱、そして